

火星

平成二十五年十二月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

かたぶつと言はるる人と茸狩

茸山下りきて犬に嗅がれたる

てのひらに熟柿の冷えを量りをり

柚子に色出でし神在日和かな

日ざらしの石運び来し冬用意
初冬の巢箱へ鳴れる御手洗川
冬立つや二階の窓に人の顔
朝月の西に貼りつく枯蓮田
白湯飲んで遠き蘆火を思ひをり
鯛の眼をすすりし音と冬籠

太白星

梨むいて母の忌日をひとりゐる
星月夜疲れやすきは母ゆづり
秋の蝶返事の返事のはがき来る
新米を持ちて下宿へ子の帰る
鳥籠と犬の子連れて秋の航
水音へ石段下りし吾亦紅
老いし鵜の立ちて眠れる花木槿

杉浦典子

浜口高子

向き変ふるとき赤とんぼ濃かりけり
つまづきつ十六甕豆摘みにけり
俎にとんぶりこぼる後の月
貴船川に浸すくるぶし秋彼岸
畳一枚ほどの根釣の夕づける
一すぢとなる藻の流れ九月かな
隠沼をへこませへこませ赤とんぼ

火星作品

山尾玉藻選

菊 膾 齡 の 口 を 拭 ひ た る 宝 塚 山 本 耀 子

骨 酒 の 冷 め し 脇 息 月 射 せ る

子 規 思 ひ つ つ 水 の 辺 の 良 夜 な る

い び つ な る 子 規 の 頭 に 月 上 る

蛇 穴 に 高 野 の 空 を た つ と べ ば

秋 口 の 鶏 冠 の 瘤 の 鮮 し き 神 戸 深 澤 鱻

刈 安 や 水 分 の ま う そ れ ら し く

大 病 を 凌 ぎ し ひ と や 木 練 柿

放 生 会 稚 児 の 水 桶 ふ く ら め る

十 六 夜 の 驕 ら ぬ ひ か り 渡 り け り

筆 太 の 兜 太 の 一 字 鷹 渡 る 宝 塚 山 田 美 恵 子

鏡 よ り 砂 の こ ぼ れ し 月 明 り

座 の 柿 の み る み る 剥 か れ 坊 泊 り

選のあとに 山尾 玉藻

菊 膾 齡 の 口 を 拭 ひ た る 山 本 耀 子

「菊膾」は風雅な味を楽しむ気品ある食べ物であり、「口を拭ひたる」の行為には齡を重ねてきた穏やかな嗜みを感じられる。

放生会 稚児の水桶ふくらめる 深澤 鱧
亀すでに翁の眼 放生会 奥田 順子

両句共に京都男山八幡宮の亀の放生会を詠んだものである。一句目、水桶の中の亀の動きを「ふくらめる」で鮮明に再現してみせ、読み手もつい覗き込みだくなる。

二句目、亀の薄目を「翁の眼」とはよくぞ言つてのけた。この上なく目出度い。

筆太の兜太の一字 鷹渡る 山田美恵子

金子兜太氏の書はふてぶてしくもお目出度い。空を渡る鷹の力強い羽音がその祝祭性を一層のものとする。鷹は兜太氏自身。

紅萩をくくりし胸の濡れぬたり 蘭定かず子

何故濡れたのかは無駄な形容であり、それを消し去つていくところが句の眼目。尚且つ、白萩ではなく絶対的紅萩の一句である。

廊曲がるたび新たななる秋の風 小林 成子

大寺の廊を辿りながら細やかな感性が働いた「新たななる」である。文体は平明ながら「秋風」への深い観照があり存問

がある。

石たたき画布に紺色ふえゆける 坂口夫佐子

鶺鴒は水の近くに生息する。画布に紺色が塗り込まれていく様子から、池や沼の碧潭が見えてくる。静寂感を湛える秋冷の一句。

手をつなぐ手を出しにけり秋の風 城 孝子

こころ細さが漂うのは「秋の風」の所為ばかりではない。不確かなものを「手」という感覚で探つているように感じるからである。

二上山ふたかみの 見えてたたみし秋扇 大山 文字

車窓に見つけた二上山の穏やかな山容にふどころ和み、使つていた秋扇を自ずと閉じたのだろう。穏やかな姿の「二上山」が活きている。

行き合うて眼をそらしけり茸山 西村 節子

人は引け目があると眼を逸らす。作者も茸が見つからず気が塞いでいたのかも知れない。「茸山」には翳りの趣がある。

冬瓜の何ごともなく売れ残る 松山 直美

中七は説明ではない？冬瓜の茫とした実体を心得た感受。しかも下五のどんでん返しだんげしの故なき可笑しみがいよいよ冬瓜そのものと言える。

曼茶羅の前でつまづく秋の風 藤田 素子

人は躓くと思いが一瞬後ろ向きとなる。曼茶羅図の前で躓けばこころの翳りは一人であったことだろう。「秋の風」が身にしみる。(以下略)

恒星圈

波田美智子

新涼や小さき鯨の南蛮漬
老い行くは淋しきものよ唐辛子
九十の誕生日会小鳥くる
仲秋の月仰ぎけり坂なかば
返り咲く石段隅の葎の花

戸田 春月

深澤 鱧

目つぶれば風に乗りくる邯鄲よ
源平のいくさの浜の赤とんぼ
秋ざくら食堂の犬人に馴れ
雁渡し大工道具を肩にして
月代や駈くる幼なを親が追ひ

この椿象やつば次郎にいらはれし
蝸や太郎男湯次郎女湯
柿剥くや長々と堆み母の皿
野分あと在所の鯉は色尽くし
秘すれば花稲負鳥は葉隠れに

野澤 あき

藤原 冬人

新松子城のてつぺん日章旗
真葛原葉裏のしろき九月かな
子規の碑のうしろへ廻る昼の虫
台風のあとの日ざしや咽渴く
新松子海より低き木椅子かな

藪のごと竿並べ立て鯉船
風を背に鷺のイむ稲の花
草雲雀瑠璃色の空なれば鳴き
天空へ棚田のぼれる曼珠沙華
秋風や鉄の臭ひの水掬ひ

獅子座

山尾玉藻推薦

藤田素子

田中文治

今澤淑子

天地のゆらぎに舞ひし桐一葉
秋の灯に履歴一葉つづりけり
波音のとき風音ぬくめ酒
柚味噌の焦げし香に猫鳴きにけり

涼野海音

井上淳子

天の川紺の背広を吊りにけり
鳥渡りをり廃校のグラウンド
その頃のわれは無職や鰯雲
ふるさととほ禿山ばかり衣被

西村節子

西畑敦子

山畑に父の立ちぬる白露かな
夜仕事の父の鞆に炎の青む
きりぎりす鉄扉に鍵の穴二つ
キリシタン村の口なる草の花

異邦人のごとし黄色の曼珠沙華
波音を胸にたたためる秋日傘
ピザ食ぶる口開けてをり鰯雲
秋雨や改札口にキムチの香
今ごろは月射しあるや弥勒石
十六夜の昨夜に続く海の色
冷まじや地に突つ立てる鬼薨
月を見に出る下駄音の入り乱る
つゆ草の溝埋めつくす水の音
妙見山へ草の絮飛ぶ日なりけり
木犀や読みかけの本いつもあり
農具一式納屋にしまひし夕月夜
また今年限りとも言ひ今年米
ログハウスに零余子飯噴く電子音
祖母の言ふ腹八分目唐辛子
柚道の暗しさるとりいばらの実